

雲南刀耕火種（焼畑農耕）民の生存戦略

尹 紹 亭*

Strategies of Yunnan's Swiddening Peoples

YIN Shaoting*

In China's Yunnan, there are 26 ethnic groups of people, most of whom used to be swiddeners. In recent decades, owing to the continuing growth of population, drastic social changes, and other reasons, it has become increasingly difficult to practise swidden cultivation. To sustain their livelihood, the people have to resort to reform. The present report, a result of field surveys, summarizes eight strategies of Yunnan's swiddening peoples in their utilization of forest resources and their solution to the inadequacy crisis of such resources. These strategies are undoubtedly of great use for us to understand Yunnan's changes in swidden cultivation and its development trends in the future.

序 文

雲南は、現在中国で焼畑農耕が最も多く存在している地域である。その分布は雲南西南部とミャンマー、ラオスに隣接した地帯に集中している。ここ百年、特にこの五十年来、人口の急激な増加と森林資源の絶え間無い減少によって、焼畑農耕民は日増しに深刻になる生存の危機に耐えて来た。

しかしひとつの重要な事実としてあげられるのは、雲南の焼畑農耕は、内部の人と土地との関わりの変化や外部からの厳しい圧力の下でも、急速には消滅していないことである。これは、焼畑農耕を速やかに消滅させたいと願っている多くの人達を困惑させている。実際この種の農業は、大量の森林資源を必要とするという欠陥をもっていることは明らかである。しかし他方、持続的に利用し続けるために、環境保護のための戦略を創造し続けてきたのである。

人々は時に根深い民族的、文化的な偏見から、焼畑農耕の環境保護に対するネガティブな影響しか認めず、これまで焼畑農耕民が創造してきた諸々の生存戦略を認めたがらなかった。そこで、筆者はフィールドワークによる資料に基づいて、雲南焼畑農耕民の8通りの生存戦略をここにまとめあげた。本論文の記述を通して、我々は彼らの生存戦略が研究に値するというこ

* 雲南民族博物館；Yunnan Museum of the Nationalities, Hai Geng, Kunming 650228, Yunnan, People's Republic of China

とを知ることができる。さらに重要なことは、彼らの生存戦略が雲南焼畑農耕民の今後の生存と発展にも、必ずや積極的な役割を発揮しつづけるであろうということである。

I 雲南焼畑農耕の分布

雲南の焼畑農耕は、現在、雲南西南とミャンマー、ラオス、ベトナムに隣接した地帯に分布している。この地域に生存している彝族、哈尼族、傈僳族、拉祜族、佤族、景頗族、布朗族、普米族、怒族、德昂族、基諾族、独龙族、瑶族、苗族などは、程度の差こそあれ、まだ焼畑農耕を営んでいる。

この地域で、なぜ発達した焼畑農耕が生まれ、なおかつ現在に至るまで続いているのか。その原因を突き詰めると、おおよそ次の点にあるといえる。まず第一に、この地域は、熱帯と亜熱帯気候の移行地帯に属し、一年を通して温暖であり、なおかつ東南と西南の季節風が盛んに吹き、雨量も多い。そのため植物資源が非常に豊富である。このような地理的環境は、狩猟採集を兼ねる焼畑耕作を主として営んでいる人々に良好な条件を提供した。次に、この地域は古代には漢文化の中心から遠く離れ、山河に阻まれ交通が不便であり、かつては「瘴気・疫病の地」と呼ばれ、それは遠くまで聞こえて旅行くものも恐ろしいやがった。漢民族などが、ここに移住をすることは困難な上、土着の民族の人口も比較的少ないレベルに止まっていたため、森林の大規模な開発や破壊を早くから受けることが無かった。例えば、西双版纳などの地域は、1950年代の森林被覆率はまだ65%位保持されていた。第三に、当該地域は山地が多く、その占める割合は、総面積のおよそ95%で、盆地の占める割合は極めて少ない。山地の地形は複雑で、灌漑施設を造ることは難しい上、高山の気温はかなり低い。多くの山は、高く険しく、水は冷たいため、灌漑稲作農業が発展するのは、かなり困難である。第四に、当地の山地民族の数は多く、特に50年代以前は民族系統が複雑であり、なおかつ厳しい民族蔑視や抑圧が存在していた。そのため山地社会は、安定せず、ばらばらで、分離、独立といった性格を著しく呈していた。したがって、開発が容易で、移動に都合のよい作業であり、なおかつ複雑な生産施設を必要としない焼畑農耕は、自然に山地民社会の需要に適合したのである。第五に、長期間焼畑農耕を営んできたことによって、各山地民族は完成された生産技術体系を形成しただけでなく、それと密接に関係した社会組織と思想体系をも形成した。もしこの生業および社会組織や思想体系まで改変しようとするならば、それは大変難しいことであり、短期間のうちにそれを実現するのは不可能なことである。以上のような理由から、雲南の焼畑農耕は現在まで存続してきたといえる。

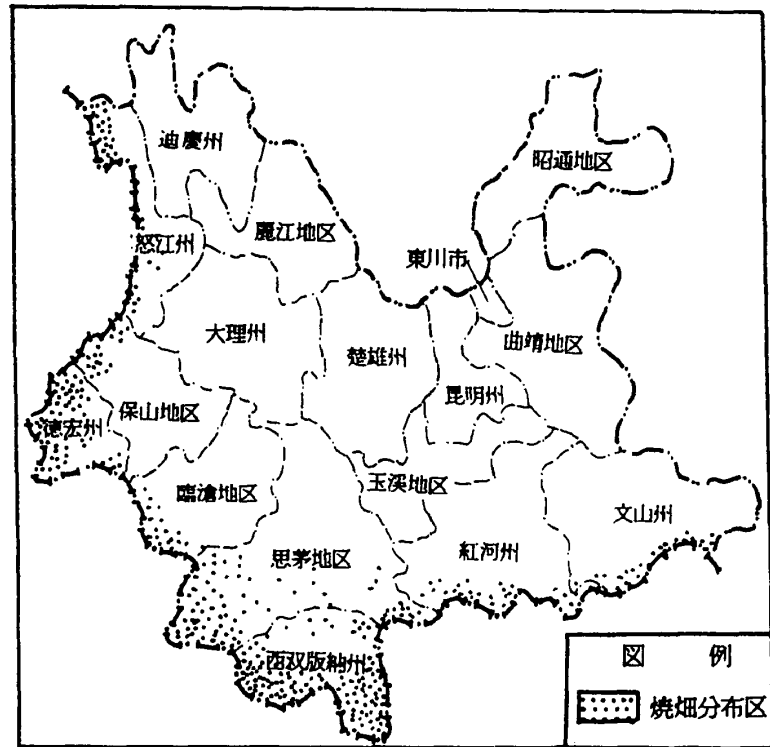
しかしながら、物事は総じて変化・発展するものであり、この焼畑農耕もまた一定・不変のものではなく、時代とともに変遷してきた。その過程をみると、おおよそ3つの段階に分ける

ことができる。50年代以前を一つの時期とすると、それは焼畑農耕が長い歴史を経たにもかかわらず、依然として、かなり盛んに行われていた時期といえる。分布も広く、その密度も濃く、伝統的な技術や文化の特徴を保持していた。50～70年代は衰退期である。この時期は、焼畑の分布も規模も縮小し、多くの伝統的な技術や文化の特徴が失われた。その原因は、社会主義への改造が進められ、大量の移民が入植したことと、疫病が効果的に制圧されたことで、人口増加を引き起こしたことである。80年代以降は急激な衰退期である。近代化の波と商品経済の激流の前で、焼畑農耕とそれに相関した伝統文化の変遷が日増しに迅速化した。50年代と比較すると、現在雲南の焼畑の分布はすでに大きな変化が生じている。雲南西南に分布している地域内では、その分布区域は連続的な帯状から断続的な塊状となり、密集状態からまばらな状態に変わってしまっている [尹 1991:3] (図1)。

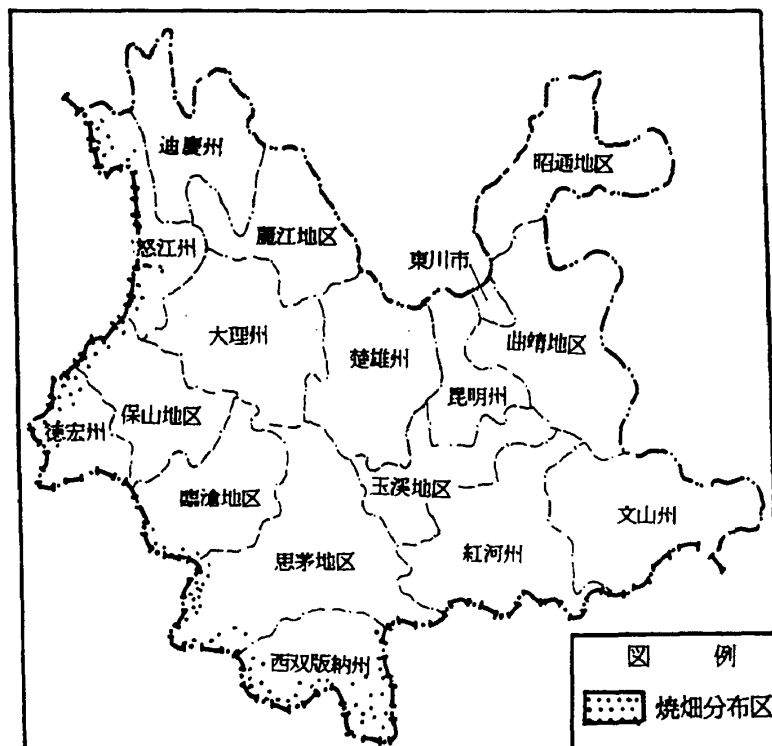
II 短期耕作長期休閑の戦略

この戦略は、一カ所の土地に一季だけ作物を栽培し、その後放置して長期間休閑させる休閑耕作方式である。これは、雲南の焼畑の最も基本的で典型的な休閑方式といえる。土地を計画的に使い、毎年順に休閑していく。これがこの休閑方式の顕著な特色である。この種の休閑制度を実施している村は、すべてその村の土地を若干の区域に区分けし、それを村民全体で毎年一区画だけ集中的に伐採耕作し、年ごとに新しい土地に換えて、順次休閑し、土地を循環利用している。区分けされた区域の多さは、主にその土地の樹木の生長周期による。雲南の各山地民族の伝統的な区分け区域は、一般的に10カ所以上あり、それぞれの区域をこのように使うことができれば、耕作後の休閑期間も十分といえ、したがって地中の樹木が再生し、森林に戻るのを保証できるのである。区画の多少にかかわらず、村民はみな区画と順序に基づいて厳格に土地利用をしなくてはならず、なにびとであっても単独で自由に土地を選ぶことは固く禁じられている。雲南の大部分の焼畑農耕民は、かつてはこの一毛作の長期休閑方式を盛んに行っていた。このことは、50～60年代の調査報告(国家民族事務委員会5種叢書)の中にも記載されている。また筆者の80～90年代の調査においても、貢山県の独龍族、盈江県の景頗族、西盟県と滄源県の佤族、瀾滄県の拉祜族(写真1, 2)、景洪県の基諾族、勐腊県の哈尼族、瑤族、克木人などのいくつかの村では、まだこの種の休閑耕作方式が継承されている。

短期耕作長期休閑方式の焼畑には、いくつかの優れた点がある。まず第一に雑草が少ないこと。第二に虫害が少ないこと。第三に表土の流失が少ないこと。第四に労力の省力化ができる(なぜなら雑草が少ないため、耕作や除草に多大な労力を費やす必要がないからである)。そして五番目に最も重要なこととして、樹木の再生に有利であり、即ち森林の持続可能な利用を保証するということである。



雲南省の50年代焼畑分布図



雲南省の80年代焼畑分布図

図1 雲南省の焼畑分布



写真1 ミャンマー国境付近の拉祜族の焼畑



写真2 焼畑では通常数種類の作物が混作される

III 輪作方式の戦略

人口の増加と土地不足により、上記の短期耕作長期休閑の焼畑耕作方式がとれなくなった時、多くの山地民族は輪作方式をとることで、危機を緩和してきた。輪作は、2、3年の短期間のものもあり、また5、6年の比較的長期間のものもある。輪作期間が長ければ長いだけ土地の節約ができる。例えば、一年耕作して長期休閑の焼畑では、一般的に一人30ムー（1ムー＝約560m²）以上の土地が必要だが、3年間輪作し、15年間休閑する方式だと、一人当たり18ムー位まで減らすことができる。また、5年間輪作し20年間の休閑方式だと、半分の土地を節約でき、即ち必要な土地は一人平均15ムーということになる。当然、現実には多くの土地は輪作には適してはいない。しかしながら、たとえ部分的にしか使えないとしても、土地に対する人口の圧迫を大いに軽減することはできる。まさにそのために、ここ40年の間、輪作方式は大きな発展を遂げたといえる。表1にいくつかの民族のよく見られる輪作方式を示した。輪作を行うことで、土地を節約でき、また一定程度の人口増加と土地減少の問題を緩和できる。この点がこの方式の優れたところである。しかしながら、輪作を行うことは雑草を繁茂させ、人々に多大な労苦をももたらすことにもなるのである（写真3、4）。

IV 植樹造林の戦略

耕作後の休閑地に植林をすることは、「糧林輪作」とも呼ぶことができる。植林は土地の休閑期間を短縮できるため、土地を節約するという目的にかなう。例を挙げて言えば、一人1年3ムーの土地を伐採耕作し、10年で一サイクルを目安とすると、一人当たりの必要な土地総面積は30ムーである。仮に休閑地に植林して、休閑期間を8年に短縮させると、一人当たりの必要面積は24ムーまで下げることができる。もし5年に短縮すれば、半分までに減らせて、15

表1 雲南省の各地域における輪作方式

(1) 西盟県佤族の例

輪作 類型	第一年	輪 作 物 第二年	第三年	休閑期間(年)
1	小豆	陸稲 (間作にコウリャン等)	陸稲	6~10余年
2	小豆	陸稲	コウリャン	
3	棉花	陸稲		
4	小豆	陸稲		
5	棉花	陸稲	トウモロコシ	
6	陸稲 (白米)	陸稲 (紅米)	トウモロコシ	
7	蕎麦	陸稲		
8	陸稲	大豆		
9	陸稲	陸稲 (改良種)		
10	陸稲	棉花		
11	蕎麦	陸稲	コウリャン	

(2) 貢山県独龍族の例

輪作 類型	第一年	輪 作 物 第二年	第三年	休閑期間(年)
1	トウモロコシ	粟	蕎麦	5-6
2	燕麦	蕎麦	ハダカムギ	5-6
3	稗	蕎麦	粟	5-6
4	蕎麦	粟	稗	5-6
5	蕎麦	稗	燕麦	5-6
6	大豆	サトイモ		3-6

(3) 景洪県基諾族の例

村 輪作 名 類型	第一年	第二年	第三年	輪 作 物 第四年	第五年	第六年	休 閑 期 間 (年)
巴	1	棉花	陸稲	棉花	トウモロコシ or 陸稲	大豆 エゴマ ゴマ	陸稲 15-20
	2	棉花	陸稲	陸稲	陸稲	大豆 エゴマ ゴマ	陸稲 15-20
亞	3	陸稲	陸稲	陸稲 or 大豆 トウモロコシ	トウモロコシ or 大豆 エゴマ	陸稲 (別の品種)	陸稲 15-20
	1	蕎麦	陸稲	ゴマ エゴマ 落花生 大豆	陸稲	トウモロコシ	陸稲 15-20
巴	2	陸稲	大豆	陸稲	大豆 or トウモロコシ 落花生 エゴマ	陸稲 (別の品種)	陸稲 15-20
	3	陸稲	陸稲	陸稲	大豆 or ゴマ	陸稲	トウモロコシ or 大豆 エゴマ 15-20
	4	陸稲	トウモロコシ	陸稲	トウモロコシ	陸稲	トウモロコシ 15-20

出所: [尹 1991]



写真3 輪作地での播種前の除草作業

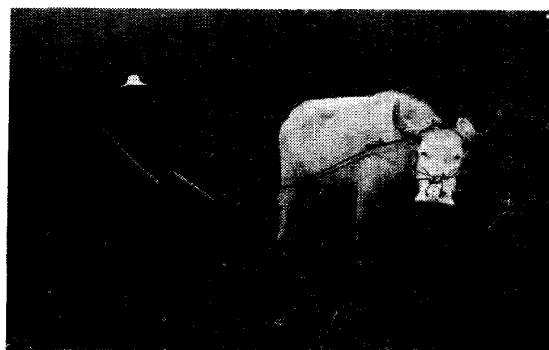


写真4 輪作地では2～3年目から犁耕する

ムーしか必要としなくなる。また実際の状況を見ると、この植林休閒方式の焼畑を行っている民族は、優れた植栽樹種を選択している。普通は、生長の速い水冬瓜（*Alnus nepalensis*、榛の木種）の木や商品価値の高いウルシノキや松などを選んでいいる。次に、いくつかの民族の植林の例を紹介する。盈江県卡場地区に住む景頗族は、現在でも焼畑農耕を営んでいて、植林は景頗族の伝統的な焼畑方式である。毎年秋に、人々は山奥に水冬瓜の種子を採集に行き、播種前に陸稲の種子に混ぜてから、地面に混播する。その後木の苗と陸稲の苗は同時に生長し、作物を収穫した後には、すでに鮮やかな緑色をした水冬瓜の木の幼林ができあがっているのである。5、6年後にはそれを伐採し、また食糧を栽培することができる。水冬瓜は、一般の樹木に比べ生長が速く、また落葉の量も多い。そのうえ根に根瘤菌をもっているので空気中の窒素を固定し、地力を肥やすことができる。またそのため休閒地の植生をできるだけ速く回復することもできるのである。

貢山県の独龍族と怒族も水冬瓜を栽培する伝統がある。しかし彼らは種子を散播するのではなく、苗木を植栽する。水冬瓜の木は秋に種が落ちるので、もし種が落ちる前に一度荒焼きをすると、発芽と生長に大変有益である。毎年12月前後、人々は山の土砂崩れした傾斜地に最も多く生えている苗木を採集にいき、持ち帰った後、それを溝に浸けて置き、清明節（4月上旬）を待って地面に移植する。数年後には休閒地はよく茂った林となっている。

泸水県の洛本卓地区の勒墨人（白族支系）、独龍族や怒族も同様に水冬瓜を栽培する焼畑を営んでいる。単にそれだけでなくウルシノキを植え、搔くことにも長けていて、ウルシノキの「糧林輪作」法を創り上げた。この方法は、まず海拔2,000m以上の高山地帯で肥沃な土地を選び、樹林を伐採し、焼畑地を乾燥させる。その後、一度掘起こして家鴨の糞を施し、2、3月の間にウルシノキの種子を散播する。2年目の3月、苗木が50cm位まで生長したら、海拔1,000～1,900mの間の焼畑耕地に移植する。比較的肥沃な土地なら1ムー当たりおよそ40～50株植栽できる。また比較的痩せた土地なら50～60株植栽できる。また地力を肥やすために、ウルシノキと水冬瓜の木を混植することもできる。4、5月にウルシノキと水冬瓜の木株の畝の

間にトウモロコシなどの作物を植える。その後3、4年はトウモロコシの連作ができるが、木が大きくなったら、再びトウモロコシの間作はできないので、栗や南瓜などの作物に切り替える。水冬瓜の木は、6～7年で伐採でき、枝葉は地面で焼き、幹は主に建築用材にすることができる。ウルシノキは8年後に掻くが、1ムー当たり年間で14kg程の樹液を採ることができる。漆は7、8年続けて掻くことができ、良いものは10年あまり採り続けることができる。木が老化したら、伐採して火入れをし、同様の植栽を継続する。

植林は、農業資源の保全や生態系のバランスの維持、そして人口が多く土地が少ないという問題を緩和する有効な方法であり、まさに焼畑農耕民の生存の知恵である。しかし、50年代からの外部の絶え間無い非難や反対、また制限などを受けて、この植林農法という優れた伝統をも「原始的な遅れた風習」として、次第に放棄されてきている。このことは、疑いもなく大変残念なことである。

V 土地調整の戦略

焼畑農耕民の中では、村、氏族、個人によって土地が多かったり、少なかったりし、人々の占有あるいは土地利用面積は均一でない。しかし、土地の少ない村、氏族、個人は、村、氏族、あるいは個人の間にある地縁、連盟、親戚、友人などの諸々の関係によって、土地の多い村、氏族、個人より一定面積の土地の一時的な使用権を得ることができ、それにより土地不足の問題を解決している。このような社会関係を利用した土地調整でよく見られるのは、借地、租借地、共同耕作の3形式である。

借地耕作は、一般的に比較的關係が良好な村、氏族、個人間で発生している。借地人は、習慣に従って、貸方の村の長老、氏族の首領、あるいは地主に煙草、茶、ビンロウ、酒などの贈り物を送り、必要な借地面積と使用期間を説明する。借地の場合は報酬は必要ない。人口のあまねく増加により、現在人が少なく土地が多くて、耕地を人に貸すことができる地区はすでに少なくなっているが、まだ一部の地域では行われている。例えば、盈江県の卡場地区の景頗族の村では、今日でも借地耕作の伝統が依然として生きている。

租借地は借地とは違い、一定の地代を収めなければならない。例えば、勐海県の布朗山の布朗族は、かつて一担ぎの種が撒ける土地面積（約4～5ムー）では、一般的に1枚銀貨を収めた。布朗族は村集団で租借耕作を盛んに行っている。不完全な統計だが、布朗山の章加村は1934年から1954年の20年間、南東に曼班、新囡、香広などの村集団が、14カ所租借耕作をしていた。基諾山の巴亜村も巴奪、巴坡、巴漂、扎磊の土地を租借耕作し、陸稲500kgの収穫があれば、約250kgの地代を収めた。また、村の北角の土地は地代も比較的安い。卡場の景頗族の租借地耕作は、1ロー（約20kg強）の種を播種できる面積（約3～4ムー）では、地代は多

いもので1.5ロー、少ないもので0.5ローであった [尹 1985:23]。

共同耕作は、関係の親密な親戚、友人間で多く発生し、これは土地のあるものは土地を、労力のあるものは労力を、種子のあるものは種子を提供して共同で耕作し、協議取り決めに基づいて食糧を分配する、一種の自主的な協同、相互利益の土地調整方式である。この共同耕作は、今世紀の50年代初頭には盛んに行われていた。例えば西盟県の佤族では、50年代の田継周氏らの6つの村での調査によると、各村の総戸数中、共同耕作に参加した戸数の比率は、最低が44.7%で、最高は100%となっている。また怒江州碧江県の一区九村の甲加と羅宜益の二つの村では、50年代初期、焼畑耕地の共同耕作面積は、全面積の94%を占めていた。碧江県の知子羅村には、怒族76戸が住み、そのうち共同耕作にかかわっていたのは61戸で、全戸数の80%を占めている。福貢県の一区である木古甲村では、水田の共同耕作が水田の総面積の41.6%を占め、耕起地の共同耕作は総面積の65%、焼畑耕地では86.6%となっている [尹 1981:35, 56, 64]。過去現在を問わず、土地の多い村や個人もあり、少ない村や個人もあるといった現象は客観的に存在する。社会的な関係をかけ橋にした借地、租借地や共同耕作は、かつて雲南の焼畑農耕民が広く行っていた土地調整方式である。しかしながら、土地制度が変遷し、人が多く土地が少ないといった現象が日増しに酷くなるにしたがって、この種の方式は昔ほどには行われなくなってしまった。

VI 移動の戦略

雲南の焼畑農耕民の大部分は定住をしているが、一部には定住しない移動民もいる。なぜ移動するのかというと、歴史的には他民族の圧迫や戦争からの逃避、鬼神観念による移住や疫病から避難するためであった。しかし最もよく見られる事例は、どちらかということ、生活環境の改善のために、焼畑に都合のよい森林を求めてである。前にも言及したが、焼畑農耕の最も基本であり、重要な特徴は休閒耕作にある。移動焼畑農耕民と定住焼畑農耕民との違いは、休閒耕作の範囲の違いにあるといえる。定住民は村の土地の限界や決まり事を受け、彼らの休閒耕作は村の土地の範囲内に固定されている。移動民は村の土地の限界や決まり事がなく、森林全体を自分の休閒耕作の範囲に見込み、もとのすみかの環境が悪化し、伐採耕作できる森林が新たに見つかりさえすれば、遠い近いにかかわらず、彼らは毅然と家を捨て、故郷を離れ耕作に赴く。80年代以前、雲南の自由移動する習慣をもつ焼畑農耕民には、瑶族、苗族、哈尼族の一部、拉祜族、傈僳族と克木人がいた。これら民族は焼畑を営むばかりでなく、狩猟採集も盛んに行い、そのため森林への依存度は極めて高かった。他方、これらの民族それ自身を見ると、彼らの中には外来に属する、当地にルーツのない民族（例えば瑶族、苗族）もいたり、比較的弱小の言わば蔑視されてきた民族支系（例えば克木人や黒拉祜）もいて、かつて彼らは自分の

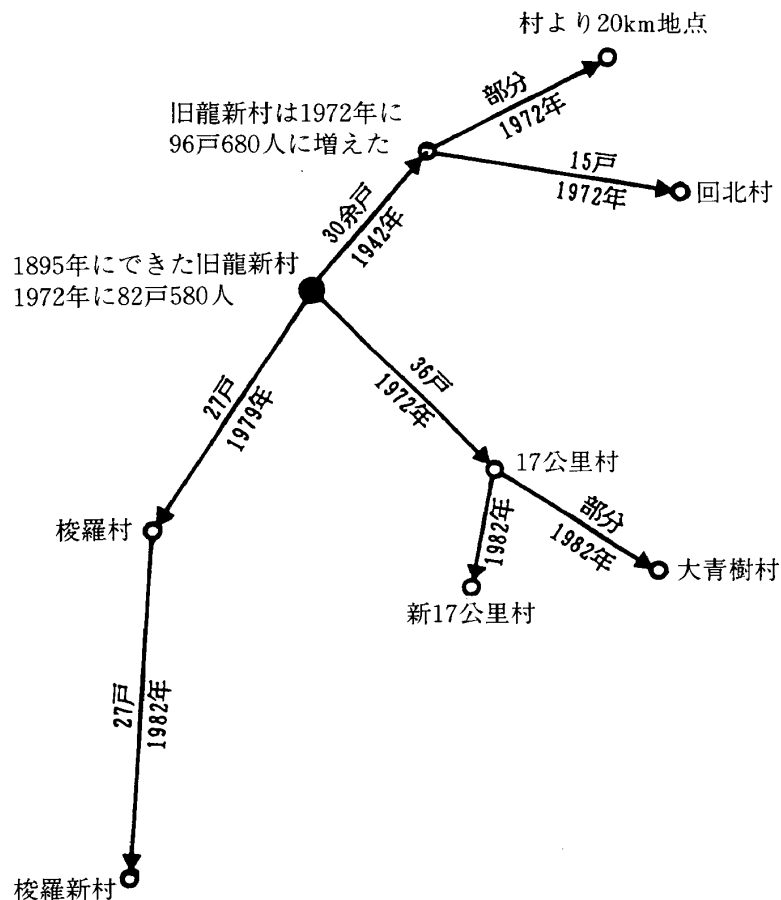


図2 麻木樹郷旧龍村の分化変遷図
出所：[尹 1992]

土地をもっておらず、思いのまま移り住んでいた。例えば騰冲県には、かつてこのようなことわざがあった。「伐根腐れば、僂僂移住する」。これは、その地の僂僂族の移動がかなり頻繁に行われていたことを裏付けているといえる。また、勐海県の拉祜族の村那賽では、1949年から1976年まで、この村の周囲数十キロの範囲内に18回（一説には17回）移動し、そのうえ2、3戸ずつ越したり戻ったりの状況は数え切れない（図2）。また、勐腊県の哈尼族村の旧龍では、1942年から1982年の40年間、人口の不断增加で森林面積が日増しに不足し、村が常に分かれて移住し、本来ひとつだった村が9つになってしまった。80年代に入ると、国家が新しい森林と土地に関する法律を公布して、森林と土地の所有を厳しく区分した。こうなると、移動を習慣とした焼畑農耕民は所有権のない、誰も管理していない森林を見つけることが難しくなり、そのため、移動によって生存の危機から抜け出す戦略は、次第に実行できなくなったのである。

VII 商品作物を發展させる戦略

商品作物を栽培し、市場で換金することで、農業への依存度を軽減することもまた、焼畑における森林資源の不足を解決するひとつの重要な手段である。雲南の大部分の山間地では、商品経済は発達していないにもかかわらず、商品作物の栽培の歴史はむしろ比較的長い。例えば、思茅や西双版纳などの基諾族、布朗族、哈尼族などの生産する「普洱茶」は、古代においても大変有名であった。明清朝の時代、黄連などの薬材を採集し、売ることも怒江峡谷の怒族や独龙族などの重要な生業であった。80年代から政府の奨励と支援によって、多くの焼畑農耕民は、商品作物の栽培を重要な発展の目標とし、大きな成果を上げた。例えば怒江峡谷では、80年代以降、主にシナアブラギリ、ウルシノキ、クルミと黄連などが発展した。当地の碧江県（現瀘水県）の架科底村は、1985年のシナアブラギリの植栽面積が3,519.1ムーまでに達し、同年の種子生産量が49,237.5kg、収入が35,451元であった。福貢県は、商品作物発展のために統一の計画を作り、海拔1,600m以下ではシナアブラギリを栽培し、1,000～2,000m地帯ではウルシノキを植栽し、2,400m以上は森林とし、森林の中に黄連などの漢方薬材を植えることとした。1985年末には、福貢県のシナアブラギリの面積は、48,900ムー強までに達し、ウルシノキは25,531ムー、黄連15,100ムー強になった。1985年のシナアブラギリの生産量は、111.5万kg、漆は12.5万kg、黄連は9,000kg強である。怒江州全体で1979年の商品林の面積は、6万ムーあまりで、1986年には50万ムー強まで発展した（怒江州統計局、1987年）。

景洪県の基諾山は、歴史上雲南南部の6大茶産地の中で第一位を占めていたが、現在この伝

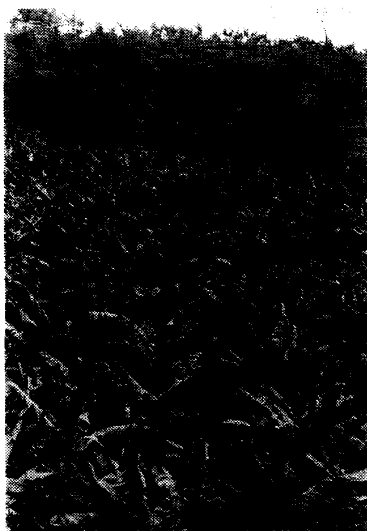


写真5 商品作物としてのバナナ栽培が、近年元江流域に多く見られる

統的な商品作物も、かつてのように重要な座を奪回した。1976年から1986年までに、茶の栽培は4,769ムーから6,630ムーまで発展し、総生産は3,143.41市担（1市担は50kg）となり、生産額は50万元あまりになった。また砂仁は、近年当地では最も速く生産が伸び、利益も一番大きい商品作物となっている。1977年から1986年まで、砂仁の栽培面積は1,705ムーから9,414ムーまで増え、総生産高は3,412.06市担、売上は200万元余りであった。1991年にはさらに15,718ムーまでに伸びた。ゴムの木も重点生産品目として、1986年には2,511ムー植え、1987年も1万ムーあまり

植栽し、1991年には20,086ムーにまで達した。このほかに果物も大きく伸び、1991年には2,607ムーであった（基諾郷統計室、1992年）。

このように、商品作物栽培による林業が発展することで、焼畑農耕への依存は、大幅に減少した。基諾山を例にとれば、1980年当地の穀物栽培面積は39,360ムーで、1985年は31,270ムーと8,090ムーも減少した。1980年の穀物収入は741,000円で、総収入の66.6%、同年の商品作物と副業による収入は、総収入の33.4%しか占めていなかったが、1985年には、両者の比率は完全に逆転してしまい、穀物収入は総収入の32.7%までに下り、林業製品の収入は2,312,000円で、総収入の62.6%までに上昇した。一人当たりの平均収入も1980年の134元から1986年の481元までになり、3倍強に増えた。

商品作物の大量栽培と、それによる商品経済の発展は、山地民族と市場との関係を密接にしたといえる。完全な焼畑農業への依存から市場への部分的な依存へと次第に転換し、自給自足経済から商品経済へと転換することは、疑いもなく山地民族の各方面に多大な影響を生み出している（写真5）。

VIII 草地耕作の戦略

周知の事実ではあるが、焼畑農耕民にとって、もし利用するに足るだけの森林資源がなく、土地を長期間休閑させることができなければ、森林の回復は難しく、土地はやがて草地化する。この草地を耕作するのは、地力の退化、雑草の繁茂、虫害などの問題上、焼畑よりはるかに困難である。このため農民は、焼畑の何倍もの労力を費やし、その上さまざまな対策を講じなくてはならない。次に騰冲県、麗江および怒江3つの地域の事例を挙げ、焼畑農耕民の森林消失後の草地耕作における幾つかの戦略を紹介したい。

騰冲県漢族の森林消滅後の草地耕作は、独特の鋤、犁を用いる耕起と野焼きを結び付けた方法である。草地はふつう1年か長くて2年耕作し、その後7、8年休閑する。新開墾地は、9月に鋤で起こし、翌年1、2月に耕す。ただし鋤で起こす方法は、他の地域と違い、土を垡状（塊）にし、土塊は打ち砕かず、また土塊中の雑草は土中に埋めて腐らせずに、日に晒して乾燥させ、火入れの燃料にする。犁を用いた耕起法も同様である。3、4月になって乾燥した土塊の草の面を内側にして積み上げ、直径1～3mの大きさがまちまちの円形の保壘状にする。その中に牛糞、乾燥した木の切り株や松葉を置き、火をつけた後、草のついた土塊で上を塞ぎ、粗く泥を外側に積み上げ、最後に細かく土で覆う。7日間焼いた後に土山を開けて、再度草の根や塊をいれ、また泥土で覆ってゆっくりと焼く。清明節（4月上旬）になって、完全に灰状に焼き上がった土山を竹で平らにかき広げる。それから陸稲を播種し、土山の中心のよく焼けた赤土をとってかぶせる。2年目も耕作を続けるならば、大量の施肥をし、常に除草をす

る必要がある。この種の野焼きの方法は、焼畑農耕の継承と言える。それは、固まった土壌を柔らかくするだけでなく、雑草や害虫の繁殖を抑制することができる。

麗江県の山地民納西族は、森林消失後の乾地を2つの農法で耕作している。一つは、休閒耕作の実施であり、もう一つは休閒耕作の連作を行わないもので、休閒耕作地に犁耕と野焼きを結合させた方法である。新開墾地に7月、一度耕起して、11月再度起こし、翌年の2、3月に山で松葉を集め、それと雑草とを一緒に地面に敷き詰めて焼く。このとき1ムー当たり約300kgの松葉を焼く。4月にエン麦を播き、6、7月に除草、10月に収穫する。その後引き続き豌豆を一回栽培した後、3年間休閒する。火入れをせずに連続して乾地を耕作する方法も、耕起、施肥および輪作を結合した農法である。どの土地も播種前には、3度耕起し、3度ならす。肥料は主に厩肥で、それを作るために、ほとんどの家では数十頭のヤギと数頭のあか牛を飼っている。また、この外に若干の緑肥も植えている。輪作方法は土地によって異なるが、肥沃な土地には、2年間馬鈴薯（夏の食糧として）とハダカムギ（冬の食糧として）を植え、3年目に麻あるいはカブ、または白インゲンかソバを栽培する。4年目には再度馬鈴薯を植え、間に豆やソバなどの作物を植える。痩せた土地には、1年目に馬鈴薯、2年目には他の作物に変える。

怒江峡谷は、雲南で名高い焼畑の根絶地域であるが、現在乾地の耕作面積はすでに焼畑を大きく上回っている。この地の乾地耕作の発生と発展は、16世紀中頃より傈僳族が、北方から大量に入植して来たことと密接に関係している。

過度の開墾耕地化により、怒江峡谷中の森林はすでに大量に消滅してしまっている。木株が剥き出しになっている峡谷の傾斜地を前に、怒江兩岸に暮らす怒族、傈僳族などが焼畑を営むことは、もはや不可能となっている。彼らは土地の勾配の大きさによって、鋤と犁を使い分けて耕作している。そこから「鋤耕地」、「牛犁地」という名称ができ、両方とも連続して耕作できる乾地である。この他、彼らは施肥しない焼畑のやり方も変えた。毎年大量の落ち葉を集めて、厩舎につめて堆肥をつくり、それを大量に地面に投入することで、地力を維持させている。一般的にムー当たり1,000kg以上施肥する。峡谷北部は、藏族の影響で、ムー当たりの施肥量が、しばしば2,000kg強にもなることがある。まさに鋤犁による耕作と施肥によって、怒江峡谷の乾地耕作の発展は強固になったといえる。

IX 水田開発の戦略

水田開発は、疑いもなく、森林と土地資源への圧力を緩和する有効な手段である。雲南の焼畑農耕民の多くが、早い時期から水田耕作を行っていた。例えば、彝族は、早くも4世紀には水田耕作をしていたという記録がある。また、瑶族、苗族、德昂族、景頗族、佤族、布朗族、

怒族、傈僳族などの民族の一部は、中華人民共和国成立以前より、すでに水田農業を兼ねて営んでいた。水田の開発が最も遅かったのは、独龍族と基諾族で、前者は1952年に始まり、後者は1957年に始まった。図3には、卡場の景頗族と怒江の独龍族の水田面積の推移を示した。

水田開発について言えば、雲南紅河流域に住んでいる哈尼族の棚田農業を特にあげるべきであろう（写真6）。紅河の哈尼族は、紀元前2, 3世紀に、北部の金沙江より南下して来た。彼らは、紅河の山地にたどり着いた後、はじめは焼畑を営んでいたが、人口が大幅に増加して

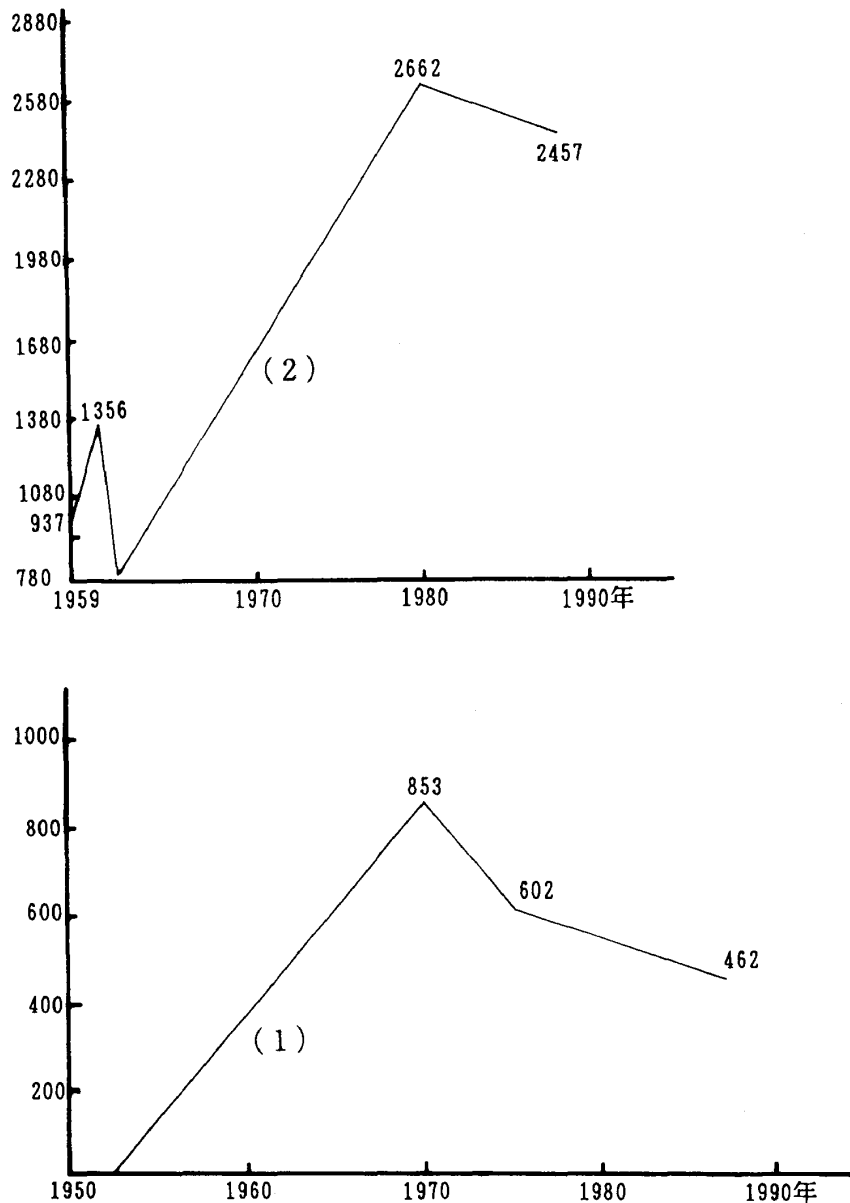


図3 水田面積の推移

(1) 独龍江地区独龍族の水田の推移

(2) 卡場地区景頗の水田の推移



写真6 紅河流域の哈尼族の棚田



写真7 怒江峡谷に広がる怒族と傈僳族の畑と新しい棚田

からは、棚田の開発を始め、明代にはこの地の棚田農業はすでにかなり発達していた。現在の紅河山地では、水源のある山の傾斜地は、すでに開発され、山裾から頂きまで、棚田が交互に幾重にも連なり、実に壮観な眺めである。棚田農業は集約型の農業形態であり、人類にとって安定した利用システムといえる。紅河の哈尼族が創り上げた棚田農業は、他の地域の山地民族の発展に、間違いなく学ぶべき、参考となる価値をもっている（写真7）。

結び

以上、雲南の焼畑農耕民の持続的な生存と発展を求めての8つの戦略を紹介した。まさにこれらの戦略によって、雲南のいくつかの山地民族の焼畑農耕は、今日まで続いてきたのである。しかし、人口が一層増加し、森林法規がより強化されるにつれて、焼畑農耕は一步一步消滅に向かって行くことであろう。そして、乾地の耕作が固定し、水田開発や商品作物の栽培が雲南の焼畑農耕民の主要な生存手段となることであろう。

謝 辞

本稿は中国語で書かれたものを渡辺建美氏に翻訳していただいた。ここに記して謝意を表します。

参 考 文 献

宋恩常；張文照，1981.『怒族社会の歴史調査』雲南人民出版社.

王树立；宋恩常．1985．『布朗族社会の歴史調査』（2）雲南民族出版社．

尹紹亭．1991．『一個充滿爭議的文化体系——雲南刀耕火種』雲南人民出版社．

——．1992．「基諾族的刀耕火種——兼与雲南其他刀耕火種民族的比較」『国立民族博物館調査報告』
17(2)：268-274．